

緑地帯

きじとら出版は、広島市内の自宅で営む、ひとりきりの出版社だ。2015年からこれまでに、海外絵本を13冊刊行している。始まりは、翻訳家を目指していた私が絵本翻訳コンテスト「いたばし国際絵本翻訳大賞」で受賞したこと。主催の東京都板橋区は、絵本の町として知られるイタリアのボローニャと縁が深



小島 明子

緑地帯

翻訳した「きょうは、おおかみ」で「第20回いたばし国際絵本翻訳大賞」を受賞したときは夢のようだった。これまでの受賞者のように出版してもらえないはず！と期待して、発表から待つこと3ヵ月。主催の板橋区に電話をかけ、出版の予定がないことを知った。そういえば、前年度大賞の絵本「世界のまんなかの島 わたしのオラーニ」も日本語版が出ていな

小島 明子

海外絵本と歩む旅①

く、毎年、英語部門とイタリア語部門での翻訳コンテストを開催している。応募を始めて3年目の秋、課題の絵本にハートを射抜かれた。パステルカラーの愛らしいイラスト、手書き文字でつづられるシンプルな言葉。そこにあるだけで、部屋の空気が変わるのを感じた。タイトルは「Virginia Wolf」。20世紀英国を代表す

る女性作家ヴァージニア・ウルフにささげるオマージュだ。ウルフのつづりは Woolf。その「o」がひとつ消え、Wolf（おおかみ）となって物語が生まれる。ある朝、目を覚ますとおおかみのようになっていた妹のヴァージニアは、むしゃくしゃして当たり散らし、ベッドにもぐりこんで出てこない。姉のバネッサは妹のために絵筆を取り出し、壁に理想の庭

ブルームスベリーを描く。モノクロの世界に色彩がふられていく場面の美しさは感動的だ。作者はキョウ・マクレア。画家イザベル・アーセノーはのちに、国際アンデルセン賞候補者に選ばれる実力派だ。きじとら出版の原動力となる「きょうは、おおかみ」の出会いだった。(こじま・あき) きじとら出版 代表 広島市

海外絵本と歩む旅②

い。出版する会社がないなら、私がやろう。迷いはなかった。アートと空想が織り成す物語「きょうは、おおかみ」に対し、「世界のまんなかの島」は、小さな村の生活を細やかに描いたノンフィクションだ。異なる魅力と美しさをもつ2冊の原書を並べ、心が躍った。絵本の世界の奥行きを示すこの2冊を日本に紹介できるなら、それだけで出版社を立ち上

げる価値がある。決意から2ヵ月後、2014年7月に会社を設立。著作権交渉や販売ルートの確保など、実務がスタナー、印刷会社の協力を得て、本づくりの体制を整えた。翻訳者としての作業も進めていった。コンテスト応募時の訳は、あくまで私ひとりのもの。全国の読者に読んでもらう本にするには、

他者の目が必要だ。コンテスト審査員の金原瑞人先生に監修を務めていただき、編集者と相談を重ね、最終訳にたどり着いた。自信を失いかけた時は、尊敬する金原先生の言葉が支えになった。「小島さんが訳者なんだから。自由に！」そして15年3月、絵本2冊が完成、全国へ旅立っていった。いよいよ、きじとら出版の出版だ。(きじとら出版代表 広島市)

緑地帯

違っけど同じ。それが、海外絵本を通じて伝えたいことだ。慣れ親しんだ日常とちよっと違っ風景がそこにある。服装や髪形、肌の色も違っかもしれない。お祭りや習慣、食べ物も違っだろう。「世界のまんなかの島 わたしのオラ一二」のページを開けば、イタリヤの強い日差し、乾いた空気がまでも感じられる。

家にいながらにして別の国に行

小島 明子

海外絵本と歩む旅③

けるのは、海外絵本の大きな魅力だ。「たびネコさん ぐるりヨーロッパ歩き」では、さまざまな街を散策するネコさんと、それを見つけては指さす男の子がほほえましい。絵本を読むだけで、外国の子どもとつながる。遠い国も身近に感じる。海外絵本を手渡すことは、平和の種をまくことだ。

どの国でも、子どもは同じだ。好奇心が旺盛で、いたずらをしたければ、作家が子どもという存在を肯

定しているから。その幸せを願っているからだ。 これまでに刊行した13冊の海外絵本は、おもしろいほどに個性豊かで、どれも違っ。同時に、子どもたちの幸せを願っ思いは共通している。優れた絵本には、大人の良心が込められている。その思いを伝える役割の一端を担うことができ、とてもうれしく思う。

(きじとら出版代表 広島市)

緑地帯

これまで携わった海外絵本で感じたことのひとつが、絵本作家の文化的背景の多様性だ。「きょうは、おおかみ」の作者キョウ・マクレアはカナダ人だが、英国人の父と日本人の母をもつ。日本語版を贈ると、「母に母国語で読んでもらえてうれしい」と言ってくれた。画家イザベル・アーセノーは、フランス語圏であるカナダ・ケベック州在住。文化が交わる風土で

小島 明子

海外絵本と歩む旅④

育っている。

「世界のまんなかの島 わたしのオラ一二」の作者クレア・A・ニヴォラは、イタリヤ系移民の両親をもつニューヨーク育ち。「こ

からイタリヤへ移り住み、現在は南フランスに居を構える。

「こどもってね……」のベアトリチェ・アレマーニヤは、母国イタリア、拠点とするフランス、

文章作家と画家の国籍が異なるケースも多い。いずれも文章はイタリヤ語の絵本だが、「木の葉つかいはどこいった?」の画家はスペイン人、「とびっきりのおむかえ」の画家はスイス人。最新刊す

てきってなんだろう?」の画家は、コロンビア人の父をもつ英国人だ。

ねこのジエーン ダンスだいきき!」のバレリー・ゴルパチョフはウクライナ出身。ソ連崩壊後、米国へ移住し活躍を続けている。「たびネコさん ぐるりヨーロッパ歩き」のケイト・バンクスは米国

身、英国の出版社から本作でデビュー、現在はスイスに住む。

そう、絵本の世界に国境はない。(きじとら出版代表 広島市)